秦始皇帝時期の草書的文字Ⅱ
―里耶秦簡に出現した〝草書化現象〟―

Cursive Characters During the Reign of the First Emperor of Qin (II) : Emergence of Cursive Writing on Liye Qin Slips

新井儀平（光風）
ARAI Gihei (Kofu)

秦始皇帝時期は、周知の如く、書体史的に言えば、小篆に代表される時代であり、秦隷が通行した時代である。この時期の簡牘文字資料「里耶秦簡」が影印されて公になったのは、新ためて記せば『文物』（二〇〇三・一）に所載の発掘簡報「湖南龍山里耶戦国―秦代古城一号井発掘簡報」によってである。三万六千余枚の出土が報告されているが、簡牘の影印数は表裏に記載のある簡を各々一として数え、計六〇点。その時点で見ることが可能な文字資料を根拠に、かつて秦代に初出を見る注目すべき出来事を述べてきた。「龍山里耶秦簡文字字形考」―線の点状化現象を中心として―（『大東書道研究』二〇〇六）、「里耶秦簡文字字形考Ⅱ」―草書化に向う字画の移動と字形の変化―（『大東書道研究』二〇〇九）などがそれである。

発掘簡報以後に整理が進展したことで、新たに待望の専刊の大冊『里耶秦簡』第一輯・第二輯（湖南省文物考古研究所編・文物出版社）が刊行され、これによって膨大な数にのぼる簡牘肉筆文字資料が公になったことは先の稿で記した通りである。新たに影印された文字資料には、秦代のこの時期には考えられない驚くべきことが起っている。部分的ではあるものの、どう見ても草書としか言いようのないような文字が散在していることである。書道史的に、書体史的に遥かに想像を越えたこの特筆すべき新事実については、昨年に書いた拙論「秦始皇帝時期の草書的文字」―里耶秦簡でわかった新事実―（『大東書道研究』27号二〇二〇・三）で述べたところである。この新事実は、これまでの書体変遷の概念を大きく変えるものであり、様々な視点からの再考が必要になってくるのではないかと思う。

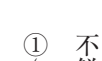
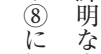
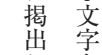
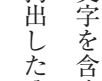
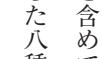
前稿では極端に変容した「しんにょう」の姿に着目、広範にわた

る〝草書化現象〟、隷書と草書の分岐と考えられるような出来事について述べたが、本稿はその〝草書化現象〟についての続稿である。

ここでは下記の五文字を取り上げる。

1「中」、2「四」、3「夫」、4「從」、5「之」

1、「中」字について

まず「中」字について記す。説文小篆にあげる形は「」に従う字で、左右が上に突き出した「」に作るが、金文の形の多くは「」「」に作り、また「  」に作る金文（散氏盤・齊侯鎛など）も少なくない。白川静『字統』によれば、旗竿の形で、卜文・金文には上下に吹き流しをつけたものがあり、中軍の将がもつ旗の形である、という。こうした類の字形は、戦国の簡牘においても通ずるものがあり、上下の字画が多様に変化した形で盛んに使われている。その一例を記せば「包山楚簡」（）、「郭店楚簡」（  ）、「上海博物館戦国楚竹書」（  ）、「清華大学蔵戦国竹簡」（  ）など色々な形で使われている当時流行の横画を付加したような字もある。また、もう一方の金文の字形「  」に作る字も、形が平たくなった状態でいくつもの簡牘に出現する。つまり、戦国の早がきの肉筆では、「中」字は、こうした字が入り混った状態で通行していたことが読みとれるのである。

ところで里耶秦簡は計六，〇〇〇点を越え、その字数は一体どれだけになるのか、数えられる状態ではないが、その中で「中」字は不鮮明な文字を含めて計四〇字を越える。その形は大別すると図**1**①～⑧に掲出した八種。図**1**①は、金文の早がきの忽卒の文字。②は先に述べた戦国に流行の横画を付加した類の字形だが、これ一字のみ。③の形は戦国に多く通行した文字で十二字を見る。④は、第一画が縦画に変ったいわゆる秦隷風の字形だが、意外に少なく僅か数文字。⑤は左側の縦画が消えて、第一画が横画に変り、左側がはっきり開く。まったく形態を異にする字形である。だがこの種の文字は意外に多く、十一字を数える。秦以前に他の文字で左が空白の字はいくつもあるが、「中」字の形としては秦代に初出を見るものである。字形が崩れるというのには、いくつかの理由が考えられるが、このように一字の左側が広くあくという現象が発生するのにはそれなりの要因がある。紙がない時代、五ミリとか、一センチの竹の簡の中に筆写体の早がきで文字を書くとすると、左側の縦状の線は外れやすい。こうしたことに起因して姿を変えた字は、実は少なくないのである。こうした事の文字の実例と経緯については、かつて拙論で指摘したことがあり、中国出土資料学会研究発表（於・慶應義塾大学）でも述べたことがある。ちなみに「中」字にも共通す

ると考えられるこの現象の一例を別の字で示せば、早くも戦国初期の簡牘「曽侯乙墓竹簡」（図2）の文字に見ることが出来る。いずれもこれらの字形は、簡巾の狭さに起因して左側が欠けているのである。この状態でも通行するとなると、後には、意識的に左側を書かなくなることが起る。（ちなみに後の「車」字の草書字形は「 」の形になる。）「包山楚簡」に見る字形（図3）にも、意識的に左側をあけた共通性が看取できる。「里耶秦簡」の⑤の字形は、いわばそうした類の字である。⑥に掲出した字形はその延長上にあり、⑤のように左を広くあけているということでは共通するが、下部の横画を中央まで引いて途中でやめている点に違いがある。この字形は、忽卒の早がきによる結果ともとれるし、意識的に横画を中央の縦画の所まで引いて止めているとも考えられる。文字変遷の一コマを見る思いがする。「中」字としては、字形的に篆書とも隷書ともまったく質を異にする姿である。ちなみにこれに似た現象は、後に頻繁に現われることになる。図4・居延新簡、図5・敦煌馬圈湾に見える「中」字もその一例。

注目すべきは、図1⑦と⑧の字形である。各々一字出現するのみだが、秦代としては想像を越えた出来事が起っているのである。⑦の字は、二画目の横画が点状、⑧の字は、二画目がなんと左から右上に向って押し上げている。まさに⑦⑧のこのやり方はこの時期に初出を見るものであり、字画的には後の草書字形と大差がない。ちなみに参考までに王羲之〈十七帖〉、智永〈真草千字文〉などに見る典型的な草書字形を図6に掲出する。「中」字の草書字形の淵源が秦代にあったということが考えられるのである。「里耶秦簡」中に出現したこの新事実は特記しておかねばなるまい。

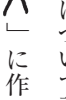
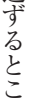
2、「四」字について

「四」字は里耶秦簡中に非常に多く、不鮮明な文字を含め、計二〇〇字近くを数える。大別すると六種ほどになる（図7①～⑥）。①は極端に少なく金文にみる古い字形で二字。②も少なくこれ一字のみ。字形は特殊な形だが、戦国にはよく見かける字形である。③の字形は戦国の多くの簡牘や帛書に頻繁に使用されている見慣れた字形である。この形は里耶秦簡中でも最も多く、約半数に近い。④の字形は、左側に縦画が出現する。第一画がその縦画から始まる字形で、左下で折り曲げたり、或いは画数としては篆書と異なり、五画になる。いわば秦隷に属するものだが、里耶秦簡には意外に少なく一〇字に満たない。⑤は早がきで筆路や書き方が散漫になり周囲の線が離れ出す。注目すべきは⑥に掲出した類の字形。⑤の延長上にあり、下部の横画が消えて左右両側から中央に向けて突き離す書き方の文字になる。つまり輪郭を左回転と右回転の二筆で書く状態の

字形で、筆順的には篆書的書き方の文字であるが、書法的には篆書から離脱した姿を示す。この字形で注目すべきは、下部に囲いになる横の線がないことである。と言うよりも明らかに書いていない。突然現われたいわゆる草書的字画の文字である。書体史的に考えにくいこの時期に、篆書、隷書の概念とは無縁のこんな形の字が通行していたのである。瞬間に王羲之の草書字形（図8）が目に浮かぶ。この特筆すべき形の文字は、里耶秦簡中に六字を確認できる。この類の中には、内側の縦二画の線が点状にまで変化した字も見える。里耶秦簡に発生した〝線の点状化現象〟についての解説は先の拙稿で指摘しているのでここでは割愛する。小篆に代表される秦代にあって、この字形は隷書への方向性とは異にして、明らかに草書への方向性が読みとれるのである。秦代にはこのような〝草書化現象〟がいろいろな字に起っているのである。王羲之に見る字形（図8）は、元を辿れば、既に秦代に始まっていたということはなんとも驚きである。ちなみに、ほぼ同時期の秦隷の簡牘「睡虎地秦墓竹簡」には、このような現象は見あたらない。

3、「夫」字について

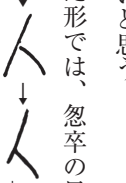
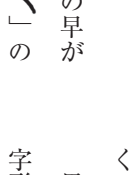
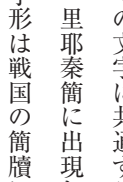
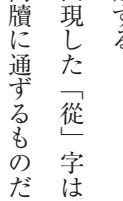
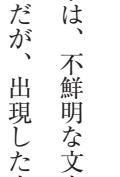
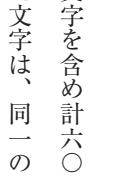
次に「夫」字について記す。この字については、かつて里耶秦簡が公になる以前に、戦国の文字資料として拙論『郭店楚簡文字字形考』（二〇〇一）の中で取り上げたことがあるが、本稿ではそれとの関係の中で里耶秦簡の「夫」字について記す。

「夫」は、古く金文では「 」に作り、「  」（人の正面向きの形）の上部の方に説文に言う簪を一画加えた形である。この金文字形は戦国に通行した簡牘に見る筆写体の文字と深く関わりを持つ。「郭店楚簡」「包山楚簡」「上海博物館戦国楚竹書」や「清華大学蔵戦国竹簡」など多くの簡牘に共通するものである。ここで取り上げる里耶秦簡の字形も戦国の金文の延長上にあり、忽卒の早がきによる字画の崩れ方や、線の長短の違いはあるものの、基本的には篆書字形「  」に通ずるところがある。

里耶秦簡に現われる「夫」字は、不鮮明で判読しにくい文字を含め、計五〇字に近い。字形は様々で図9①～⑧に掲出したように字形が定まらず、微妙に変化する様子が看取できる。その字形からは、説文小篆「 」や、秦の刻石に見える小篆「泰山刻石」（ ）との接点は探しにくく、また字形的にも字画的にも後の隷書字形（ ）との接点も見あたらない。里耶秦簡に見るこれらの字形は、金文字形の延長で発展してきたことだけは確かだと思う。それらの文字には早がきで字形が崩れた字と発展の進度が遅く古い形の字と、それに筆路に大きな変化が生じている字とが混在していることである。

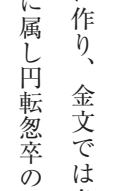
注目すべきはその⑧の形。篆書にも隷書にも属さない形だ。この字形はこの時期としては初出を見るものである。その字形からは、結果的に草書へのはっきりした方向性が読みとれる。後の居延漢簡（図10）に出てくる草書字形もこの類である。崩れ方の手順とその字形は、後の典型的な草書字形「智永・真草千字文」、「孫過庭・書譜」（図11）などに見るそれと酷似する。接点が感じられて興味深い。「夫」の草書字形の形や筆順の淵源が里耶秦簡が通行した秦の時代にあったということが判明してきたのである。草書字形の「夫」字は、明らかに篆書字形を母体にして発展してきたものであり、書体史的に特筆すべき出来事だと思う。

余談になるが、字形変遷のプロセスの一例について、過去に指摘したことがあるが、参考までに触れておきたいと思う。

例えば、「 」のような斜角が向い合った形では、忽卒の早がきになると筆路が近路を通り「  」のように変化し、二画目がずれてだんだん下に下っていく。その変化は最終的には「  」の形にまでになる。つまり里耶秦簡に見る「  （夫）」の字形は「  」の順で発展したと考えられるのである。このプロセスの姿はいろいろな字に見られ、余分なことだがよく似た字形の「  （天）」も草書字形では「  」となるのである。

4、「從」字について

「從」と後述する「之」字については、里耶秦簡の大冊が刊行される以前に、拙論で触れたことがあるが、後に貌大な文字資料が公になり、これらの字についても新事実が出てきたので、新ためて考察を重ねておこうと思う。

「從」字は、説文小篆では「 」に作り、金文では多くは「 」に作る。簡牘の字形はその後者に属し円転忽卒の早がきの違いはあるものの基本的には金文に通ずる姿を示している。里耶秦簡の一つ前、戦国に通行した簡牘の文字は「  」などに作り、その字形は郭店楚簡、包山楚簡を初め当時の筆写体の多くの文字に共通する。

里耶秦簡に出現した「從」字は、不鮮明な文字を含め計六〇余字。字形は戦国の簡牘に通ずるものだが、出現した文字は、同一の文字資料でありながら、字形の崩れ方と変化の度合いにおいて大きな差異が発生していることである。大別すると図12①～⑥に掲出した如くである。その①は、字画的には戦国の文字と大差がないが、②では旁の下部の形「 」が一気に「 」形に変貌、字形は不安定だが、いわゆる秦隷の体。③では簡略化が進む。草書化への傾向が強い。里耶秦簡では①②③の類の字形が大半を占める。ちなみ

に「 」が早がきで「 」形に変化する〝草書化現象〟は、図には出さなかったが「走・定・徒」などの多くの字の下部に看取できる。④は忽卒で流動的な動きが加わる。⑤では、本来の字形から離脱した姿に変化、更に草書的動きが加速する。

注目すべきは⑥の字形。ここには驚くべきことが起っている。その字形は、旁の上部は草書と同じ二筆に近く作り、文字全体が極限にまで簡略になっていることである。ちなみにこの⑥の字形はこれ一字のみ。文字の姿は、後の典型的な草書字形、王羲之・十七帖、孫過庭・書譜（図13）のそれと通ずるところがある。里耶秦簡の文字資料によって「從」字においても先の「中・四・夫」同様に草書字形の淵源が、早くも秦の篆書時代にあったということがわかってきたのである。

5、「之」字について

里耶秦簡に出現する「之」字は、計一五〇字余り。その字形は大別すると八種を見る（図14①～⑧）。共通するのは、中央に垂直の縦画がある字形である。ほぼ同時期の「睡虎地秦墓竹簡」や「龍崗秦簡」と通ずる形である。秦代以前、戦国に通行した帛書、簡牘に見る殆んどの字形は、線に長短の差はあるものの「 」の如くで、つまり斜画二本が左側に倒れた円転の書き方の字形である。この字形はいわゆる南方楚系文字に見る特色の一つで、長沙楚帛書、郭店楚簡、包山楚簡をはじめ上海博物館蔵戦国楚竹書、清華大学蔵戦国竹簡、そして信陽長台関楚簡や九店楚簡など多くの簡牘に共通する字形である。ところで里耶秦簡に見る「之」字は、その種の字形とは異なる別の類の字形である。この字に関しては戦国の簡牘の文字との接点は感じられない。「之」の金文では、「 ・ 」「 ・ ・ ・ 」などの字形があり、つまり中央に垂直の縦画を含む字形と、斜画で構成された字とがある。また説文小篆の字形は「 」につくり中央に垂直の縦があり、秦の刻石「泰山刻石」の字形もまた同じように左右相称の字形である。つまり里耶秦簡に見る中央が縦画垂直の字形は、小篆および垂直の縦画のある金文との接点が想像できるのである。

里耶秦簡、図14①は、左右相称形でその早がきに違いない。②③④の字形では、金文字形との接点が感じられる。筆路が移動して字形に変化が生じ、発展する方向性が定まらないが、早がきの筆写体として書きやすい形に変化しつつある。実は里耶秦簡では③④の類の字形が大半を占めているのである。⑤の字形は、各々波勢を帯びた秦隷の体。どういうわけかこの類の字は意外に少なく二〇字ほどである。⑥の字形は各々の線が短くなって点状に向い、終筆は隷書

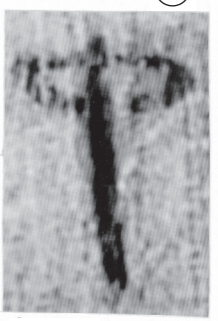
のそれとは異なり、対照的に短く突き放す。⑦⑧の字形では線の流動的変化が目立ち、その⑦では第一画が短く二画目以降は「乙」形の状態になり、篆書字形から離れ草書の動きになる。特に注目すべきは⑧の字形。すっかり姿を変え、なんと第一画は点状で、その下を草書字形と同じように間を置いて空間を作り、二画目に移る書き方にまで発展しているのである。このやり方は後の草書字形を彷彿させる出来事である。里耶秦簡中にこの字は計三字を検出することが出来る。参考までに草書の典型とされる王羲之の書を図15に掲出する。里耶秦簡という限られた時期の文字資料の中で、一つの文字が書体的にこれだけの大きな変化と発展していることは何とも驚きである。とにかく秦代における想像を越えた新事実が次第にわかってきたのである。

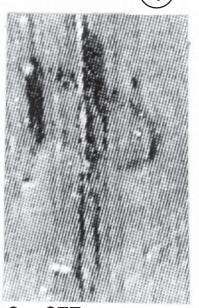
以上、里耶秦簡に出現した「中・四・夫・從・之」の五字について述べてきた。先の拙稿でも記したように、里耶秦簡の文字は、意外にも横意識の隷書的方向というよりも、むしろ草書的方向への傾向が強いことが読みとれるのである。この時期に秦隷と同時に〝草書化現象〟が発生し、隷書、草書の分岐が考えられるような出来事が起っていたのである。書道史、書体史の再考の必要が生じてきたかと思う。専家の方々の叱正を賜りたい。

図1　里耶秦簡「中」

①
9－35

②
5－4


③
8－1497


④
8－877

⑤
8－1200

⑥
8－1439

⑦
8－839

⑧
8－173

図2　戦国・曾侯乙墓竹簡

「車」

「輔」

図3　戦国・包山楚簡

「黄」

図4　居延新簡

「中」

EPF22.197

EPF22.191

図5　敦煌　馬圈湾漢簡

「中」

63

図6　王羲之　十七帖

「中」

智永　真草千字文

図8　王羲之

「中」

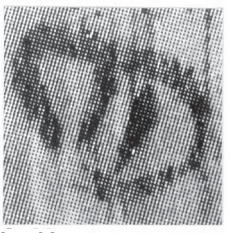
四紙飛白帖

冬中感懐帖

四月三日帖

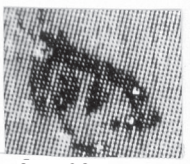
図7　里耶秦簡「四」

⑥



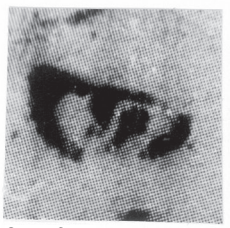
8－287

9－1818



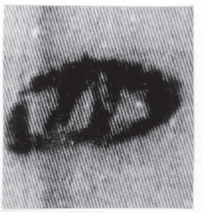
8－793

8－1332

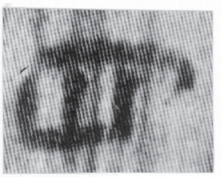


8－565

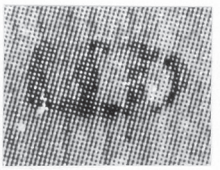
⑤



9－1788

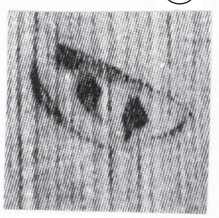


9－2214



8－773

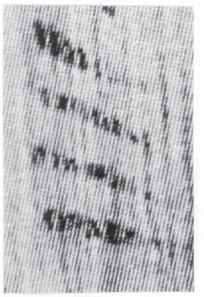
⑤



8－989

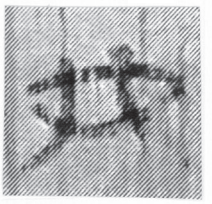
8－498

①



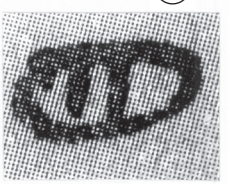
8－154

②

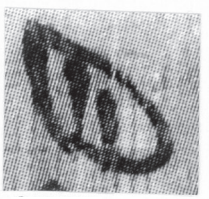


5－7

③



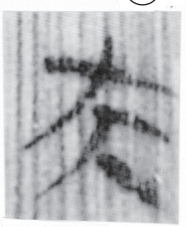
8－1052



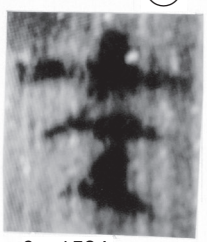
8－1889

図9　里耶秦簡「夫」

①
8－765


②
8－1445

③
8－157


④
9－1584

⑤
8－19

⑥
8－138

⑦
8－1557

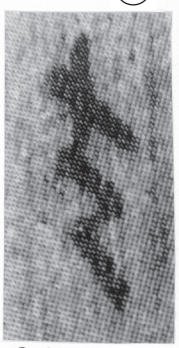
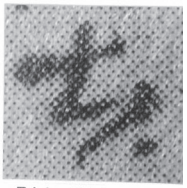

⑧
8－1238

図10　居延漢簡

「夫」


511－30

536－13

505－32A

図11　智永　真草千字文

「夫」

孫過庭　書譜

「夫」

図12　里耶秦簡「從」

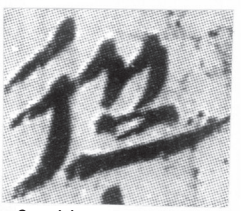
①

8－69

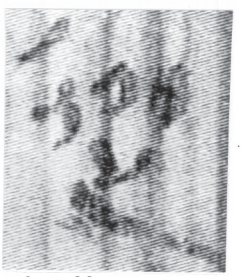
8－1605

②

9－1



9－11



9－1881

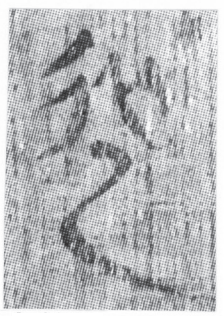
③

8－1442

9－128

④

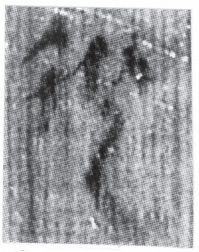
8－157



8－2209

⑤

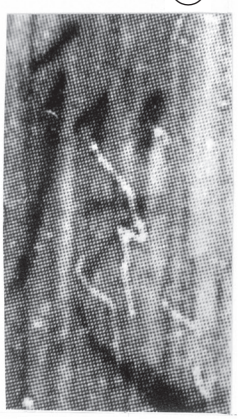
9－804



9－1279

8－2231

⑥



9－2335下

図13　王羲之　十七帖

「從」

孫過庭　書譜

「從」

図15　王羲之　十七帖

「之」

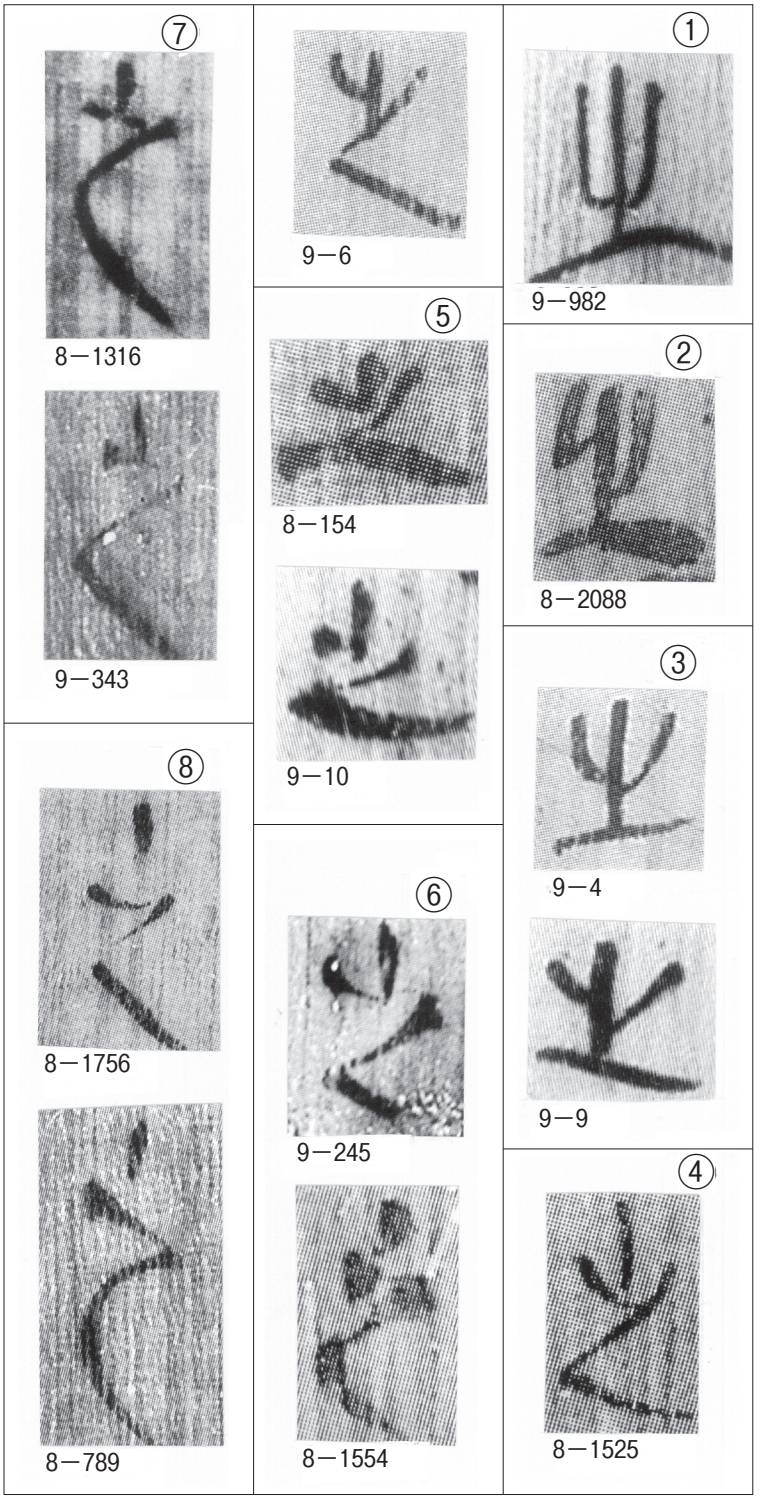



図14　里耶秦簡　「之」